氏　　名	祝原　あゆみ
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第５２１号
学位授与年月日	平成３１年３月２２日
審　査　委　員	主査　教授　　津本　周作
	副査　教授　　藤谷　昌司
	副査　教授　　稲垣　正俊

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

インターネットは急速な普及をみせており、その依存状態が問題となっている。わが国の教育現場ではICTを活用した教育が推進され、教員がインターネットを使用する必要に迫られている。申請者は中学校教員を対象とした全国調査を行い、at-risk Internet Addiction (IA)の頻度とその関連要因について研究を行った。調査対象者は、無作為抽出した全国の中学校140校に所属する教員3,326人とし、有効回答1,696人(有効回答率51.0%)を分析に用いた。無記名自記式質問紙による調査を行った。調査項目は基本属性、インターネット使用状況、Internet Addiction Test (IAT)によるat-risk IAの評価、Japanese Burnout Scaleを用いたBurnout Syndrome (BOS)の状態とした。at-risk IA 群は、IATスコア40点以上とした。BOSは、3つの下位因子ごとにそれぞれ四分位に区分した。分析は、at-risk IA群とnon IA群の各項目の2群間比較を行った。また、BOSの各下位因子の四分位群とIAの平均値の関連をANOVAとANCOVAにて検討した。さらに、多変量解析を用いてat-risk IA群に対する各独立変数の寄与を算出した。

全国の中学校教員においてat-risk IA群は、96人（5.7%）であった。at-risk IA群は、私的目的でのインターネットの60分間以上の利用、ネットサーフィンやゲームの利用と、正の関連がみられた。これらの要因を調整した上で、at-risk IA群とBOSの下位因子のひとつである「脱人格化」とは正の関連を、「個人的達成感の低下」とは負の関連を示した。

以上から、本研究は、新しい時代の課題であるat-risk IAにおいて、わが国の中学校教員のインターネット使用状況やBOSの下位因子の寄与を全国規模で明らかにした点で、意義のある研究である。「脱人格化」の早期発見を行うことで、at-risk IAを予防できる可能性があることが示唆された。